

# 「再び君を造ろう、祖国よ」

## スィーミン・ベフバハーニーの作品に見られるヴァタン像

鈴木珠里

### I. はじめに

スィーミン・ベフバハーニー(1927 - 2014)はイランを代表する現代詩人であり、21世紀のイランの民主化運動のシンボリック的存在であった。14歳の時に当時のパフラヴィー政権を批判する詩が新聞に掲載されて以来、ベフバハーニーは70年以上イラン社会や社会的弱者の実情を詠ってきた。自身が語る通り、彼女の作品を発表された年代順に並べれば、それはイラン現代史そのものになるほどである<sup>1</sup>。彼女の関心はこうした社会的テーマに限定されず、古典文学、宗教、日常生活、家族や夫への愛にまで多岐にわたる。ヴァージニア大学でイランの女性と文学を研究し、ベフバハーニー作品の英訳にも携わったファルザーネ・ミーラーニーによれば、「コーランやハディースから仏陀やキリストの言葉に至るまで、哲学や歴史から民間の風刺まで、イランの伝説から西洋文学まで、ことわざから民話まで、『フィガロの結婚』から『美しき青きドナウ』まで、あらゆる全てのものが、彼女の詩の中にはある。ベフバハーニーは、彼女の作品以前のペルシア文学の花園にはなかった数百の花や草や鳥を賞賛できるほどの綿密さで描写しつつ、同時に、戦争や革命も描くことができるのだ」<sup>2</sup>。24歳で出版した処女詩集『壊れたセタール』<sup>3</sup>以降、翻訳や選集、散文集を入れると書籍は20冊あまりに上る。ペルシア古典詩のガザル(抒情詩)形式に韻律の改良を加えた独特のスタイルを用いたため、「抒情詩人 ghazal-sarā」とも呼ばれている。長年の詩作活動が認められ、1999年と2002年、ノーベル文学賞候補にノミネートされた<sup>4</sup>。またイラン作家協会のメンバーとして表現の自由を訴える

<sup>1</sup> Behbahānī, Sīmīn, “Mosāhebe bā majale-ye Subarū” *Woman and Narration: Gendered Narratives in Oral and Written Persian Literature*, Fujimoto, Yuko ed., Osaka Univ., 2011, p.34-35.

<sup>2</sup> Milānī, Farzāne, “Moshtī Por az Setāre” *Zanī bā Dāmanī-ye She’r, Jashn-nāme Sīmīn Behbahānī*, Dehbāshī, ‘A’lī ed., Tehran : Mo’ase-se-ye Enteshārāt-e Negāh, 2004, p.14

<sup>3</sup> Behbahānī, Sīmīn, “*Se-tār-e Shekaste*”, Tehran: Enteshārāt-e ‘Elmī, 1951

<sup>4</sup> 2013年にはベフバハーニーの長年の作詩活動に対し、ハンガリー国際ペンクラブからヤヌス・バンノウス最優秀詩人賞が贈られた。ヤヌス・バンノウス賞は、ハンガリー・ルネサンスを代表する詩人ヤヌス・バンノウス(1434-1472)を記念し2012年にハンガリー国際ペンクラブによつ

一方で、イラン社会における女性の権利向上のための運動に長年携わり、海外の人権団体から様々な賞を受けている<sup>5</sup>。

本稿の表題に用いた彼女の代表作「再び君を造ろう、祖国よ」は、1979年に起きたイラン・イスラーム革命と翌年勃発したイラン・イラク戦争によって荒廃したイランを建て直すことを誓った詩である。発表された1982年当時から祖国愛<sup>6</sup>の詩として高く評価されていたが、2003年アメリカ在住のイラン人歌手ダーリュシュ・エグバーリー<sup>7</sup>が曲を付けたことにより、イラン国内では民主化運動の、イラン国外では望郷のテーマソングとしてさらに広く愛唱されるようになった。

本稿では、社会的弱者や女性たちの立場を憂慮する詩を数多く詠み、彼らの権利向上と真の民主化を求めて自ら活動し、「イランの国母(mādar-e hame-ye farzandān-e irān)」<sup>8</sup>として国内外のイラン人たちから慕われたベフバハーニーが、「祖国(vatan)」という語にどのようなイメージを抱き、未だにその理想のvatan像からはほど遠い祖国イランにどのような思いを込めていたのかについて考察する。

## II. ペルシア語における vatan の概念

ベフバハーニーの作品を見る前に、ペルシア語における vatan という単語の概念の変化について述べておこう。

アラビア語からの借用語であった vatan は、ペルシア古典文学の中では単に「住む場所」「住処」「故郷」を意味する単語であった<sup>9</sup>。その vatan の概念が変化したのは20世紀初頭の立憲革命期であったと、イランを代表する碩学、シャフィーイー・キャドキャ

---

で創設された。毎年国際的に活躍した詩人と翻訳家に授与され、受賞者にはハンガリー政府から賞金が贈られる。

<sup>5</sup> 1998年ヘルマン・ハミット賞、1999年カール・フォン・オツキー賞を人権団体 Human Rights Watch から授与。2006年検閲に対する運動が評価されノルウェー作家協会表現自由賞が贈られた。

<sup>6</sup> ペルシア語で「祖国愛」「愛国主義」を意味する語は、vatan-parastī (vatan=祖国、parastī=賛美)をはじめ、vatan-khāhī (khāhī=求めること) / vatan-dūstī (dūstī=愛情) / vatan-garāī (garāī=主義) など複数ある。

<sup>7</sup> DārūshEqbālī(1951-) ベフバハーニーは1962年からラジオ局で歌謡曲の作詩を担当し、そこでダーリュシュと親交を持った。

<sup>8</sup> 直訳すれば「イランの全てのこどもたちの母」

<sup>9</sup> 例えば、11-12世紀に活躍した古典詩人ムイッズイー(مُعِزِّي 1048頃-1125頃)の作品「かつて愛しい人が友人たちと果樹園にいた場所は 狼と狐の家となり梟と秃鷹の巣となった」  
آنجا که بود آن دلستان با دوستان در بوستان / شد گرگ و روبه را مکان شد کوف و کرکس را وطن  
では、vatan は「巣」の意味で用いられている。

ニー<sup>10</sup>は指摘している。

もしバハール<sup>11</sup>の作品を大河と見なし、そこで二匹の大きな鰐を捕まえたとしよう。その二匹の鰐のうちの一匹は「祖国 vatan」というテーマで、もう一匹は「自由 āzādī」である。「自由」に対しての最大の賛美はバハールの作品に見られるが、「祖国」という概念についての最も美しい称賛も、また彼の詩の中に見て取れる。(……) この時代の詩は、「自由」というテーマの脇で「祖国」が論じられる。忘れてはならないのは、この時代、vatan には二通りの意味があり、「祖国」という概念は立憲革命期から始まった、ということだ。(……) かつての vatan は、フランス大革命以降に語られた vatan の理解とは全く違うものであった。<sup>12</sup>

この vatan=祖国という概念は、その後定着して現在に至り、「愛国主義／祖国愛 vatan- parastī (vatan=祖国、parastī=賛美)」や「売国奴 vatan-forūsh (forūsh=売人)」などの造語も存在する<sup>13</sup>。なお、「愛国主義／祖国愛 vatan- parastī」という単語はいわゆる偏狭的ナショナリズムの意味で用いられることは少ない<sup>14</sup>。

では、イラン人にとって「祖国＝イラン」にはどんなイメージがあるのだろうか。一度でもイランを訪れた者であれば感じるだろうが、イラン人は「イラン」という国に誇りを持っており、その根源は、アケメネス朝ペルシア（もしくはそれ以前）にまで遡る歴史と、周辺諸国は言うに及ばず西洋文学にまで影響を与えてきた文学（特に韻文）であるように思われる。それを痛感した体験談を挙げるには枚挙にいとまないが、中でも一番印象に残っているのは、日本での麻薬不法所持で収監されたイラン人の取り調べに立ち会った時のことである。一通りの調書を終えて再び後ろ手に組まれ牢に戻される直前、そのイラン人がペルシア語で私に言った。「私からあなたに一つアドバイスをしたい。あなたが本

<sup>10</sup> Kadkani, Mohammad Rezā Shafī (1939-) 文学研究者、作家、翻訳家。M.Seresh というペンネームをもつ詩人としても活動。長年テヘラン大学文学部で教鞭を取った。

<sup>11</sup> Bahār, Mohammad-Taqī (1886-1951) イラン立憲革命期を代表する桂冠詩人、文学研究者・政治家。

<sup>12</sup> Kadkani, Shafī. *Advār-e She'r-e Fārsī: Az Mashrūtiyat tā Soqūt-e Soltanat*, Tehran: Enteshārāt-e Tūs, 1980, pp. 37-38

<sup>13</sup> 黒柳恒男『新ペルシア語大辞典』大学書林 2002年 1928頁

<sup>14</sup> 「この「愛国主義 vatan-parastī」とは、レザー・シャー時代に席卷していた「狂信的愛国主義 National Chauvinism」ではない。」Shafī, *op.cit.*, p.38.

気でイランの現代詩を学ぶつもりなら、ペルシア古典詩を学ぶべきだ。ハーフェズ<sup>15</sup>やルーミー<sup>16</sup>を知らなければ、本当の意味で現代詩も理解することはできない」と。彼は、取り調べの合間、私が「イラン現代詩に興味がある」と余談程度に言ったことをずっと気に掛け、別れ際にそう忠告してくれたようだ。そのイラン人は決して学歴が高いわけでも高潔な人間でもなく、また暢気に文学談義などするような状況でもなかったが、それでも「言わずにはいられない」ほどのペルシア文学に対する自負心に、私は思わず「イラン人だなあ」と苦笑しつつも感心したのだった。

こうしたイラン人の祖国への自負と愛は、第二次大戦中にイランへの祖国愛をテーマに作詞作曲された「ああイラン」という国民歌が、今も、思想信条を問わず、オリンピックやワールドカップ、時にはデモの際にも歌われることから窺うことができる。

ああ、イラン 宝溢れる国よ  
君の大地は善意で溢れ  
君から遠ざかれば悪意がはびこる  
君よ、とわにとこしえに  
敵が石となるならば 君は鉄となる我が祖国の  
清き大地のために この命捧げよう<sup>17</sup>

この冒頭の「ああイラン、宝溢れる国よ」の「宝」が何を意味するかと問えば、おそらく多くのイラン人が「長い歴史と質の高い文学」と答えるであろう。スィーミーン・ベフバハーニーはまさにこうした共通認識のイランを詠う、vatan- parastī（愛国主義）の詩人の一人なのである。

### III. ベフバハーニー作品に見る vatan

#### 1. vatan に込められた思い

---

<sup>15</sup> Hāfez, Shams al-Dīn(1326?-90 頃)「イラン人の家にはコーランとハーフェズの詩集は必ず置いてある」と言われるイランを代表するペルシア古典詩人。ドイツの文豪ゲーテ(1749-1832)の最高傑作と言われる『西東詩集』は『ハーフェズ詩集』から多大なる影響を受けている。

<sup>16</sup> Rūmī, Jalāl al-Dīn (1207-73)ペルシア文学最大の神秘主義詩人。旋回舞踊による修行法で有名なスーフィー教団メヴレヴィー教団の開祖。

<sup>17</sup> Encyclopædia Iranica <http://www.iranicaonline.org/articles/ey-iran> (2018年9月24日確認)

ベフバハーニーの作品の中で vatan は様々な形で語られているが、その中で一貫して変わらぬ vatan への想いがある。それを最もよく表しているのが、彼女が「祖国愛の詩人」として一躍有名になった作品「再び君を造ろう、祖国よ」である。

再び君を造ろう、祖国よ！たとえこの身を礎にしようとも  
柱を君の屋根に接ごう、たとえこの骨を礎にしようとも

再びその匂いを嗅ごう、君に咲く花を！ 君の若者たちが望むとおりに  
再び洗い流そう、血まみれの君を！ この止まらぬ涙で

再び、ある日、光が訪れ 暗闇はこの家から立ち去るだろう  
自らの詩に色を付けよう 君の空の蒼色で

たとえこの身が消えて百年経とうとも 私は墓の傍らに立つだろう  
そこで悪魔の心臓を引き裂くために 我らの雄叫びによって

「朽ちた骨」<sup>18</sup>を創作する者は ありがたくも  
まるで山のような雄大さをこの身に授けてくれよう 試練の場においても

たとえこの身が老いさらばえようとも もし教育の機会があるならば  
我が幼子らとともに 一からやり直したい

「祖国愛」のハディース<sup>19</sup>を熱く激しく語りたい  
全て心からの言葉として 魂を込めて それ以外口からは出ることはない

いまだ胸の中に炎が燃え盛り  
周囲の人々の暖かさで減ろうとは考えられない

<sup>18</sup> 「朽ちた骨」 عظم رميم ハーフエズの抒情詩「百年後もし私の墓の傍を通らば 朽ちた骨が土から現れ陽気に踊る」を前提にした言葉

سر برآرد ز گلم رقص کنان عظم رميم بعد صد سال اگر بر سر خاکم گنری  
<sup>19</sup> 「祖国愛は信仰の一部」 Ḥubb al waṭan min al-îmān حب الوطن من الإيمان

再び力を授かろう たとえ私の詩が血となろうとも  
再び君を造ろう！ この身に代えて たとえこの力の限界を超えても

(「再び君を造ろう、祖国よ」 *Dovāre misāzamat, vatan*)<sup>20</sup>

この詩で詩人が語る *vatan* は、イスラーム革命に続いて起きたイラン・イラク戦争で疲弊しきったイランそのものである。興味深いのは、ここでは *vatan* を二人称単数形 *to* تو として擬人化し、語り掛け、再興を誓っている点である。ペルシア語において二人称単数形は、親しい相手もしくは神のごとき唯一の存在物に対して用いるものであることから、ベフバハーニーと *vatan* の距離感を見て取ることができる。

そして何よりも注目すべき点は、彼女にとっての *vatan* とは、「私」をはじめとする人々の手によって造るものであり、また未来の世代たちのために造り直すべきものである。この *vatan* 観こそ、ベフバハーニーの祖国愛詩の根幹を成すものであり、晩年までイランの真の民主化を訴え活動してきた彼女の一貫した姿勢でもあった。したがって、*vatan* が人々の手から離れ、体制側によって一方的に造られた場合、それは詩人にとってもはや *vatan* ではなくなってしまう。

## 2. 国家が *vatan* と乖離するとき

「再び君を…」では、革命と戦争によって疲弊した現状のイラン、つまり *vatan* そのものが前景に描かれているのに対し、以下の詩では *vatan* に対して害を及ぼす大統領の体制＝「国家」が前景に現れ、*vatan* と乖離した存在として描かれている。

もし祖国の怒りの炎がさらに高く燃え上がれば  
お前の名が刻まれた墓石には悪臭が交わるだろう

お前は多弁なお喋り好きとなり限りなく横柄になった  
お前の戯言のごとき主張は 嘲笑の元にしかならぬ

お前が見付けた嘘は繊維のごとく織り込まれ

---

<sup>20</sup> Behbahānī, *Majmū'e-ye Ash'ār-e Sīmīn Behbahānī*, Tehran : Mo'asese-ye Enteshārāt-e Negāh, 2003, pp.711-712

お前が燃った縄はお前の首をくくことになるだろう

お前の頭の中で膨らんだ高慢がお前の信念の目を曇らせる  
地に臥した象はもはや起き上がることはないのだ

身の丈に合わぬ権威を与えるな 我が地を風に委ねるな  
頂天を望む渋面の雲は 涸れ地にひれ伏すことになるのだ

この悲鳴を、暴行を、流血を、止めよ  
神の創造物たちを涙で喪に服させるな

事が成就した暁に 我が呪いがお前に降りかからぬよう  
我が敵が痛む時 また我が心も痛むことになろう

たとえお前が私を火あぶりか石打ちの刑に処すことを望もうとも  
お前の手にある燐寸は消え そして手にした石は力を失うだろう

(「我が地を風に委ねるな」 khāk-e mā ra be bād madeh) <sup>21</sup>

この詩は、2009年、「緑の運動<sup>22</sup>」がイラン各地で展開されていた時にベフバハーニーがネット上に公表した詩である。デモに参加する者たちは、彼女の詩を掲げ行進した。ベフバハーニーはその時すでに80歳を越え歩行困難な状態にあり、また目の手術の失敗によりほぼ視力が失われていたにもかかわらず、デモ中に不当逮捕された我が子を取り戻す母親たちのデモに参加したり、デモ中に犠牲になった女子大生に哀悼の詩を捧げたりしている<sup>23</sup>。

ここで詩人が語り掛ける二人称単数形 to 「お前」は、大統領選挙での不正を問われていたアハマディーネジャード大統領である。ベフバハーニーは「お前」を激しく非難する

---

<sup>21</sup> <http://parand.se/?p=8065> 2018年9月24日確認

<sup>22</sup> 2009年大統領選挙におけるアフマディーネジャード大統領側の不正行為に対する抗議から始まった、学生を中心にした民主化運動。

<sup>23</sup> 「ネダー・アーガーソルタンへ あなたは死んではない／そしてこれからも死なない あなたはずっと生きていく／あなたは永遠の命をもっている イラン人民の声(ネダー)を」(2009年6月)

一方で、vatan をまるで神のごとき存在のように描いており、完全にアハマディーネジャーード政権下のイラン国家とは別の存在として見なしている。さらに vatan を怒らせた「お前」に災難が及ぶだろうと不吉な予言を与え、vatan を khāk (大地) という言葉に置き換えて、「大地を風に委ねるな (be bād madeh 風に与えるな=浪費するな・使い果たすな・無駄にするな)」と「お前」に警告する。

言論統制が特に厳しかった当時のアフマディーネジャーード政権下で公に政治批判をすることはまさに命懸けの行為であった。実際、当時のベフバハーニーは政府側の監視下で自宅軟禁状態にあり、海外渡航を禁じられ投獄されたこともあった。にもかかわらず、ベフバハーニーは勇敢にそして公然と詩の中で主張する。彼女にとって vatan とは、国家や政権による「国」とは一線を画した存在であり、権力者が好き勝手にするものではなく、人々によって造られるべきものなのである、と。彼女のこうした反骨精神と vatan 観は、両親によって幼少期から築かれてきた。

### 3. ベフバハーニーの vatan 観の根源

ベフバハーニーの父親アッバース・ハリリー(1893 - 1971)は、代々ナジャフとテヘランに影響を及ぼしていた名家の出身で、自身はナジャフで生まれ、その地の聖職者として当時イラクを占領下に置いたイギリスに対し反英運動を組織した。結局運動は失敗に終わり、辛うじてイランに逃れると、その後はイランに留まり、新聞発行人・詩人・作家・翻訳家として文学と関わる傍ら、モハンマド・モサッデク (1882 - 1967) らと交友を持ちイラン国民戦線の創設にも関わった。

母親のファフル・オズマー・アルグーン(1898 - 1966)はペルシア文学に精通し、アラビア語・フランス語・英語を得意とし翻訳も手掛けながらテヘランの中学校でフランス語を教える一方、女性の権利向上のための団体「イラン愛国女性協会」<sup>24</sup>の主要メンバーとして活動した。二人は、アルグーンがハリリーの発行する新聞に投稿したことが縁で知り合い結婚したが、ベフバハーニーが幼いころに離婚している。彼女は母親とその再婚相手の新聞記者とともに西洋風な環境で幼年期を過ごし、母親のもとに集まる著名な文学者や知識人、女性活動家と交流した<sup>25</sup>。このような環境下で、ベフバハーニーは自然と社会

<sup>24</sup> Jam' iyāt-e Nesvān-e Vatankhāh-e īrān 1923年創立

<sup>25</sup> 前述した桂冠詩人バハールに高く評価されていた女性詩人バルヴィーン・エーテサーミー (1907-1941) は特にベフバハーニーに多大なる影響を与えている。[Behbahāni, *op. cit.*, pp.41-42]



問題に関心を抱き、また文学的才能を開花させていったのである。14歳の時に初めて新聞『ノウ・バハール』に掲載された詩は、彼女に社会的視点がすでに備わっていたことを証明している。

空腹で呻く人民よ何をしているのか 貧しく混乱した国民よ何をしているのか  
資本家たちは金に彩られた宮殿の中 汝は悲しみの粗末な小屋で何をしているのか  
山師よ汝もこの困難な時代に うろたえた人々の命と財産をどうしようというのか  
裁判所の自由の波から逃れられても 全能の神の公正なる裁きの場でどうするのか<sup>26</sup>

この詩についてベフバハーニーはこう語っている。

初めから、私にとっては外で起こっている出来事が私の内面になりました。詩のインスピレーションは外界の出来事から得られることが多かったのです。自分自身に関する事柄でも多くの人の問題として受け取ったのです。<sup>27</sup>

#### 4. vatan——帰るべき場所

社会的関心を持ち続けた詩人にとって、イランは決して住みやすい国ではなかった。特に1979年のイラン・イスラーム革命以降、多くの知識人や芸術家、文学者たちがイランを去り別の国に活動の拠点を移していったが、ベフバハーニーは生涯イランに留まり活動を続けた。その覚悟が窺える詩が以下の「1メートル70センチ」という詩である。

1メートル70センチ この高さから私の言葉は生まれ

1メートル70センチ この場所から私の詩は生まれるのです

1メートル70センチ それは清らかで素朴な心

抒情詩を愛する魂 忍耐強い女の肉体

私の行いが醜いと思うなら それはお前が私の中に自分を見ているから

---

<sup>26</sup> *Ibid.*, p. 34

<sup>27</sup> *Ibid.*, p. 34

ほらほら 私に石を投げるのをお止めなさい お前を映すこの鏡も壊すことになる  
のだから

私が立ちあがれば 大柳となり広い木陰ができるでしょう

私が地に座れば 緑となり優美な絨毯ができるでしょう

一個の脳と 数多くの取り締まりへの恐れが 私のスカーフの下で思考となり

一個の心臓と数多くの情熱が 私のドレスの下で詩となるのです

私の根元に斧を振るのはお止めなさい 私が倒れても良いことは無いのだから

お前たちの早魃の地に 私は芽吹き櫛の木を生やし古木となるのだから

(……)

70年私はこの地に住み続けています 失われることがないように

この祖国の1メートル70センチの土地に骨を埋めるために

(「1メートル70センチ」 Yek metr o haftād sadom)<sup>28</sup>

この詩はベフバハーニーに対する言論弾圧への抗議の詩である。1998年ハータミーが大統領選で勝利した直後に催された詩の朗読会において、獄中死した作家アリー・アクバル・サイディ・スィルジャーニー<sup>29</sup>にベフバハーニーが言及した際、突然治安部隊らしき若者たちが舞台上上がり彼女のスピーチを妨害した挙句、力づくで彼女を壇上から下ろした事件がもとになっている。自分に敵対する者たちを時には咎め、時には諭しながら、最終行で自身の身長170センチ分の祖国の地 khāk-e vatan を墓にするのだと彼女は宣言する。どのような目に遭おうとも、自身は vatan から決して離れることなく死ぬまでこの地に踏みとどまる、という固い決意の表れである。

敢えて苦難の道を選んでまで、ベフバハーニーがイランに留まった理由はなんであろうか。ベフバハーニーが2009年大阪大学で講演した際、イラン以外の国への移住を考えたことはないかの質問を受け、以下のように回答した。

<sup>28</sup> Behbahānī, *op. cit.*, pp.1059-1060

<sup>29</sup> ‘Alī Akbar Sa’edī Sirjānī (1931-1994) 作家・詩人・ジャーナリスト 体制批判をした罪で逮捕された直後、獄中で不審死を遂げた。イスラーム情報省の役人に暗殺されたと言われている。

全く（ありません）。私はイランから海外に出た時はいつでも、（帰りの）飛行機の手ケットを枕の下に置いておき、一晩に一度はいつ戻れるのかとそれを眺めています。今、まさにあなたたちが私に抱いて下さる愛情と友情や、この街やこの国の美しさ、あなた方が持っているものすべてを以てしても、そして私のイランでの生活がどんなに簡素であったとしても、私はやはりイランに帰りたいのです。

もし私が（イランから）出たいと思えば、多くの機会がありました。というのはあちこちに出て暮らし（イランに）戻らない親類縁者がいますから。私の家族からも、私が望めば好きな国に出て行くことができるのに、なぜどこにも行かず、自分たちをやきもきさせるのかと責められています。でも私はイランから出られないのです。第一に、私には同胞 ham-vatan たちとの間に古くからのつながりがあるからです。もちろん、世界主義者 jahān-vatan<sup>30</sup>の人も沢山います。中でもサアディー<sup>31</sup>がそうですが、彼らはおそらくより広い寛大さを持っているのでしょう。おそらく、彼らの見識は私より広いのでしょう。世界を自身の家だと思っている人なのでしょう。でも家の一つだけの人もいます。例えば、あなたがお母さんと一緒に子供のころにアイスクリームを食べた場所とか、たとえばあなたが過ごした幼稚園とか、そういったものがここに残っているなあと思うことがあるでしょう。私にとっても、まだ私の通った幼稚園があったガヴァーモツサルタネ通り<sup>32</sup>に行くと、今でも子供に戻った気がします。<sup>33</sup>

ベフバハーニーにとって vatan とは、自身が戻るべき場所であり、最終的には骨を埋める場所である。それは過去からのつながりがある場所だからであり、そして同胞 ham-vatan（国を同じくする者）たちが暮らす場所だからだ。そしてイランを離れ帰郷したくとも叶わぬ同胞 ham-vatan たちが焦がれる場所でもあるからだ。彼女が数々の艱苦に耐えながらも、イランを見捨てることなく最期までとどまり続けた<sup>34</sup>ことは、「スィーミー

<sup>30</sup> 「世界 jahān が祖国 vatan」。自国にこだわらず、どこにでも暮らすことができる人のこと。

<sup>31</sup> 1184? - 1291?イラン古典詩人。道徳文学『薔薇園（ゴレスターン）』の著者。シーラーズに生まれ、30年間インド・中央アジア・アラビア半島・北アフリカ・エチオピアを放浪したと言われている。

<sup>32</sup> 現在の sī-tūr 通り／イラン国立博物館のある通り

<sup>33</sup> Behbahānī, *op. cit.*, p.21.

<sup>34</sup> 2014年8月19日、スィーミンはテヘラン市内の病院で亡くなった。享年87歳。彼女の葬儀には数千人が参列し、テヘランにあるベヘシュト・ザフラー墓地に埋葬された。

ン・ベフバハーニーがイランにいる」ということ自体が、イラン国内外のベフバハーニーの同胞 ham-vatan たち、すなわち「祖国を愛する人 vatan-khāh」たちにとって vatan の未来につながる希望でもあったのだ。

## 5. vatan に対する責任

「1メートル70センチ」の中で、現在のイランがベフバハーニーの vatan 像と乖離していることについて、彼女はその責任の一端を自覚していたことを示す箇所がある。

ああ、私を敵視する者たちよ、私が言葉にして語るのは真実だけだから  
お前たちの侮蔑に対し ああ 呪いで返すのはやめましょう

私はお前たちを不身持でひねくれた臆病な者に産んでしまったようです  
たとえ私がお前たちを捨てたとしても お前たちへの愛が消えることはないのです<sup>35</sup>

敵対者、つまり自分を力づくで壇上から下ろした若者たちに対し、力あるいは言葉の暴力で返すのではなく、自身が産んだ不出来な子どもと見なし、敵対ではなく寛容を以て愛するというベフバハーニーの姿勢は、彼女が実際に3人の子どもを持つ母親であったことも大きいだろうが、それ以上に、現在のイランを造った世代として責任の一端を感じていたからではないか。vatan が人々の手によって造られるのだとすれば、現在のイランの状況を造ったのは、反王制運動に参加した結果、イラン・イスラーム革命と現体制を不本意にも招いてしまった彼女たちの世代の人間であり、それゆえ、自分と敵対する体制側の若者たちを産み出したのも自分たち大人世代である、と。

私はお前たちを私に噛みつく蛇に産んでしまったようです  
だから私はこの魂と身体を以て優しくするしかないのです<sup>36</sup>

この「私に噛みつく蛇」のいる現在のイラン、つまり本来の vatan から乖離したイランを造ってしまったという自責の念が、理想の vatan を求めるベフバハーニーの原動力の一

---

<sup>35</sup> Behbahānī, *op. cit.*, p.1060

<sup>36</sup> *Ibid.*

つとなっているのかもしれない。詩人は自らの vatan を創造することを決して諦めなかった。

再び力を授かるう たとえ私の詩が血となろうとも

再び君を造ろう！ この身に代えて たとえこの力の限界を超えても<sup>37</sup>

#### IV. 結びにかえて

ベフバハーニーは自身が夢見た vatan——人々の手によって造られる vatan——を見届けることなく、この世を去った。2014年8月19日、詩人の訃報はあらゆるマスメディアで大々的に伝えられた。各新聞報道によると、3日後に行われたベフバハーニーの葬儀には芸術家、文学者、社会活動家の他に一部政府関係者も参列した。葬儀場となったテヘラン中心部のバフダト劇場から、埋葬地のテヘラン校外ベヘシュト・ザフラー墓地までの25キロの道のりは、野辺の送りに参加する一般の人々で溢れかえった。彼らはベフバハーニーの遺影を手にしながらか、国民歌「ああイラン」を歌いながらその死を悼んだ<sup>38</sup>。

ベフバハーニーの死から数年後、テヘランを中心に、ヘジャーブの強制着用に関する異議を唱える女性たちが大通りでヘジャーブを脱いで棒の先に吊るして掲げる「白い水曜日運動」<sup>39</sup>が広がりを見せた。「vatanの母」たるベフバハーニーが築いた礎は決して途絶えることなく、彼女が同胞 ham-vatan と呼ぶ「vatanの姉妹」または「vatanの娘たち」に受け継がれている。

最後に、ベフバハーニーが2009年により良き vatan を造るための運動の結束を次世代の同胞 ham-vatan の女性たちに呼びかけたメッセージで本稿の結びとしたい。

私が姉妹たちよ、私が娘たちよ！そして偉大なるイランの学生諸君、古くからの

---

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. 711

<sup>38</sup> イラン学生通信(ISNA) <https://www.isna.ir/news/93053116248> (2018年9月24日確認)  
メフル紙 <https://www.mehrnews.com/news/2354834> (2018年9月24日確認)

<sup>39</sup> 2014年、在米イラン人ジャーナリスト Marinejad, Masih(1976-)が「My Stealthy Freedom」と称してフェイスブック上にヘジャーブ非着用を上げたことから始まった運動。ヘジャーブそのものに反対するのではなく、ヘジャーブ着用が個人の意思を反映させるべきと主張した運動。2015年、NGO団体 UN watch によるジェノバ人権と民主主義サミット The Geneva Summit for Human Rights and Democracy で「女性の権利賞」を授与された。イランでは2017年からテヘランの目抜き通りでヘジャーブを棒の端に吊るした女性たちの写真が次々アップされ、身元が特定された数十人が逮捕され世界的に注目されるようになった。

イランよ。私の目であり、私の灯であるあなた方を私は誇りに思います。あなた方は望まないことに対し敢然と立ちあがり、目標を達成するために尽力を尽くしてきました。あなた方の目に躊躇いは見られず、またあなた方の言葉に不平が聞こえることもありません。(……)

現実の太陽の光は無色です。でも、その中には7つの色が存在しています。無色の行為の中にこそ、私たちの有効な太陽が存在しているのです。(……) 女性運動の結束声明に署名した<sup>40</sup>人々はこの現実に何かを望んできました。それがもし叶い手に入ったら、そこにある真実は形を成し、目に見えるものとなるのです。しかし、もし私たちがこの現実に必要な手を伸ばさなければ、その真実とつながることはないでしょう。

そのための努力を実践によって、天を思い通りに動かすのは、まさに私たちなのです。嘆願をするのではなく、義務として突きつけるのです。自らに敬意を払いましょう。「私たちは私たちの尊厳を知らねばならない！」(……)

最後に私が強調したいのは、イランの女性たちがあらゆる民族やあらゆる信仰、あらゆる文化的価値観、あらゆる集団や政党から出て、自身の権利の平等化という問題において目的を果たすために志を一つにし、一つの言葉で連盟すべきである、ということです。

この連盟の旗が振られんことを！<sup>41</sup>

---

<sup>40</sup> 2006年、「差別的な法律撤廃のための100万人署名キャンペーン One Million Signatures for the Repeal of Discriminatory Laws یک میلیون امضا برای لغو قوانین تبعیض آمیز」が女性を中心にイラン国中で広がり、多くの逮捕者を出しながらも世界中の耳目を集め、後にいくつもの団体から表彰された。

<sup>41</sup> 「100万人署名キャンペーン」の中心的活動団体“The Feminist School”のHPに2009年5月26日付けでベフバハーニーが寄稿したメッセージ。  
<http://www.feministschool.com/spip.php?article2576> (2018年9月24日確認)